



薬学部長就任のご挨拶

令和3年4月1日付

薬学部薬科学講座創薬有機化学分野 教授 河野 富一

圭陵会の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

この度、4月1日付で第5代薬学部長を拝命いたしました。このような大役を仰せつかり身の引き締まる思いですが、低迷している薬剤師国家試験合格率を向上させ優秀な薬剤師を数多く輩出できるよう、学部のかじ取り役としての責務に全力で取り組んでまいりますので、これからよろしくごお願い申し上げます。

2007年4月、学部設置時に掲げられた本学薬学部の主たる目的は、「薬学の最新知識のみならず、医療人としての総合的な知識、技能、態度を備えた薬剤師の養成」です。しかし、その目的達成度を測る指標の一つである薬剤師国家試験の結果はこれまで、第一期生が挑んだ第98回国試では90%を超える合格率が達成されたものの、その後は他大学の後塵を拝する結果が長く続いておりました。そこで、直近の第106回国試に挑んだ昨年度の6年生に対しては、前学部長のもと国家試験対策の抜本的改革をおこなった結果、第一期生に次ぐ新卒合格率(87.5%)を達成することができました。この結果はもちろん学生の頑張りによるものですが、教員と学生とが向き合った時間にも関係があるように思います。

この流れを決して断ち切ってははいけません。むしろ、より盤石なものとしさらに上昇することが必要です。そのため、国家試験を意識する高学年の教育を充実させることはもちろんのこと、基礎的な知識を身につける低学年教育にもこれまで以上に全力で取り組むことが必要不可欠であり、低学年から高学年への円滑なつながりも重要です。薬学部では5年時に、県内外の薬局と病院に実際に赴き現場から薬剤師の業務を学ぶ「実

務実習」という科目があります。これこそが6年制薬学部誕生の根幹であり、この科目を通じていかに多くのことを学ぶかが、薬剤師を目指す学生には求められています。そのため、大学と薬局と病院がより高い次元で連携する仕組みを整え、学外での学びを充実していきます。さらに、薬剤師としてスタートを切った後の卒後教育にも積極的なサポートができる体制の整備も進めていきます。

本学薬学部の強みは、薬剤師養成のための教育環境が充実しているところです。すなわち、医学部、歯学部、薬学部、看護学部が同じキャンパス内にあり、現在の医療に欠かせないチーム医療を強く意識した学部間連携講義、いわゆる多職種連携教育が入学時から行われています。実務実習の場である本学附属病院へは連絡通路一本で往来できる環境にあることから、薬剤師のみならず医師や歯科医師、看護師の存在をより身近に感じながら、臨床現場と密接に連携した実務実習が可能です。また、地域の抱える医療問題をテーマとして、薬学部のある矢巾町と協力しながらその解決を目指す学習機会があることで、地域医療のあり方を学ぶことができます。最後に、被災県だからこそ実経験に基づいた災害時医療についても深く学ぶことができます。他大学にはない、これらの強みを内外に発信しつつ最大限に活用していきます。

薬剤師になることを目指して本学に入学してくれた薬学部生個々が自己成長しさらに自己実現を果たせるように、本学教職員と共に学生に対して様々な取り組みを通じて手厚くサポートしてまいります。圭陵会の皆様におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



教授・看護学部長就任のご挨拶

令和3年4月1日付

看護学部共通基盤看護学講座 教授 **三浦幸枝**

圭陵会の皆様におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。この度、嶋森好子前看護学部長の後任として、看護学部長を拝命いたしました三浦幸枝（みうらゆきえ）と申します。このような大役を仰せつかり、責任の重さに身の引き締まる思いではありますが誠心誠意務めさせていただきます。私は、昭和54年に岩手医科大学附属病院に入職いたしました。消化器肝臓内科病棟、循環器センター、糖尿病代謝内科外来等で勤務し、病をもちながら生きる患者の価値観や生き方を理解し、自己管理を行いながら病と折り合いをつけて「その人らしい生活」を送ることを支援し研究してまいりました。平成17年、岩手県立大学看護学研究科を修了し平成27年より、岩手医科大学附属病院看護部長として平成30年3月まで務めさせていただきました。平成30年4月に、開設2年目の看護学部に、共通基盤看護学講座成人看護学慢性期領域の特任准教授として着任し基礎教育に携わってきました。

看護学部は、この3月に完成年度を迎え、一期生を保健師、助産師、看護師として社会に輩出することができました。

初めての国家試験の結果は、保健師・助産師100%、看護師96.8%と全員合格には至りませんでした。看護師国家試験全国平均（95.4%）を上回る結果となりました。今年度も、3・4学年の学生と教員で構成される、試験部会を中心として、学修の課題や進捗状況を教員と共有しながら、既卒者を含めた国家試験対策を教員一丸となり強化してまいります。

1期生の就職状況は、岩手県内に卒業生の55%が就職し、東北北海道を含めると、75%を超える就職率となりました。また、隣接する附属病院には半数近い卒業生が入職いたしました。キャンパスに隣接する附属病院を中心とした臨地実習での臨床指導者や看護職の丁寧な指導、ロールモデルとしての看護師の姿や、それらを取り巻くチーム医療の実際を目の当たりにする貴重な体験の結果だと思っております。今後も、よ

り良い臨地実習の体制をつくっていくためには、双方の後輩育成に関する連携と目的意識の共有が重要となります。臨床と乖離しているという看護基礎教育の課題を埋めるためにも、附属病院看護部や地域の実習施設との連携を図り充実した実習環境を整えるとともに、講義、演習、学内実習、臨地実習等の方法を効果的に配置し、学生が段階的に主体的に学修を深め、幅広い豊かな人間力を培うことができる体制を構築していく所存です。

令和3年4月、看護学部は第5期生91名の新入生と初めての、編入生2名を迎え学生数は、364名となりました。第5期生は、様々な専門分野から物の見方、考え方、人間の見方を広く学び、看護学を学ぶ土台作りへの学修が始まっております。大変な状況下ではありますが学生の学びを止めることなく努力してまいります。

岩手医科大学120年の歴史に看護学部開設があるのは、「誠の人間」の育成に限りないお力を注いで来られた、圭陵会の皆様方のご努力のたまものと考えております。

引き続き、圭陵会の皆様のご指導ご鞭撻の程、宜しくお願いします。

三浦幸枝 経歴

昭和54年 岩手医科大学附属病院入職
 平成13年 岩手医科大学附属病院循環器センター主任看護師
 平成17年 岩手県立大学看護学研究科修了
 平成20年 岩手医科大学附属病院消化器肝臓内科病棟看護師長
 平成21年 慢性疾患看護専門看護師
 平成25年 岩手医科大学附属病院副看護部長
 平成27年 岩手医科大学附属病院看護部長
 平成31年 岩手医科大学看護学部共通基盤看護学講座特任准教授
 令和3年 同教授



全学教育推進機構長就任のご挨拶

令和3年4月1日付

医学教育学講座医学教育学分野 教授 田 島 克 巳

圭陵会の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

この度、佐藤洋一前機構長の後任として、全学教育推進機構長を拝命いたしました。本学の教育の一翼を担う組織を任されるという大役を仰せつかり、責任の重さに身の引き締まる思いです。

全学教育推進機構の業務は、全学の連携・横断教育の推進、全学的な教育施策の企画・立案及び点検・評価、教育に係る各種補助金の応募企画、学修環境の整備計画の策定に関することとなっています。

この中でも全学的な教育施策の企画・立案及び点検・評価は、文科省の施策誘導の1つである分野別評価や機関別認証評価、さらには各種補助金に直結してくる事項になります。また、将来的には大学の存続に関わる評価になる可能性があることから、特に重要なミッションと考えています。分野別評価に関して、2017年に薬学部、2018年に医学部が受審し、2020年には第3期機関別認証評価を受審し、いずれも適合の評価をいただいています。一方で、ディプロマポリシー(DP)に基づいた学習成果を達成するためのカリキュラムの構築とDPに挙げた能力の修得を立証できる評価については不十分であるとの指摘を受けており、分野別評価では、基礎医学科目の水平統合や基礎・社会医学と臨床医学の垂直統合を進めるとともに、行動科学やプロフェッショナル教育の充実をはかるよう指導を受けています。態度・技能を含めた能力の修得を立証できる評価については学部を超えて大学として統一された評価システムを開発する必要があり、行動科学やプロフェッショナル教育も全ての学部に通じるものとなりますので、全学教育推進機構が中心と

なり対応していく必要があると考えています。

DPの習得を保証するためには、学生の各種情報の集積と解析を行う Institutional Research (IR) が必要になってきますが、本学ではこの IR は全学教育推進機構内に設置されており、機構長はその管理者となっています。この IR の業務の中には、学生の成績の分析、教育の質保証に関する情報の分析が含まれています。近年では、学習成果の達成度を可視化し、学生にフィードバックすることも求められるようになってきました。前述致しました態度・技能を含めた評価システムについては、達成度を可視化することで学生の学習意欲の促進につながるシステムを開発することが重要と考えています。

また、本学の教育の特徴の1つとして多職種連携教育がありますが、これは学部間の垣根を越えたプログラムということで、全学教育推進機構が担当しています。このプログラムは機関別認証評価でも評価されていますが、さらなる進展を期待するとも記されています。現段階では、臨床実習内での多職種連携プログラムがありませんので、導入に向けて調整を図っていくことが必要と考えています。

医療系の学部は分野別評価が行われるようになり、さまざまな教育改革を求められる時代になっていますが、評価の観点は共通であり、教育カリキュラムを含む大学の質保証と教育を受けた卒業生の質保証となります。全学教育推進機構は、そのための教育戦略と作戦を立案し、実行していくことを求められる組織ですので、その任務に向けて精進し邁進していく所存です。今後とも圭陵会の皆様にはご指導とご協力を心よりお願い申し上げます、就任の挨拶とさせていただきます。



教授就任のご挨拶

令和3年4月1日付

医学部内科学講座 膠原病・アレルギー内科分野 仲 哲 治

短夜の候、圭陵會の皆様方におかれましては、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。この度は、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。本年4月1日付けで岩手医科大学医学部内科学講座膠原病・アレルギー内科分野の教授を拝命致しました。皆様方のご厚誼に御礼申し上げます。以下、紙面にての自己紹介とご挨拶となりますが、ご容赦頂きますと幸甚です。

私は、1987年に富山医科薬科大学医学部を卒業し、同学の第一内科に入局致しました。その後、佐野厚生総合病院、国立療養所刀根山病院にて、一般内科医、呼吸器・免疫内科専門医としての研鑽を積み、1992年にIL-6の発見者である岸本忠三先生が主宰されておりました大阪大学医学部第3内科に入局致しました。この時より、大阪大学医学部附属病院の免疫内科外来・病棟主治医など臨床に携わりながら、細胞株・マウスを用いた免疫の基礎研究を行ってまいりました。そして、大阪大学医学部第3内科助教、准教授を経て、厚労省の創薬研究所である国立研究開発法人・医薬基盤健康栄養研究所研究部長、高知大学医学部臨床免疫学教授（免疫難病センター長兼務）を歴任し、この度岩手医科大学医学部内科学講座膠原病・アレルギー内科分野教授に就任致しました。

これまでの研究業績としましては、サイトカインシグナル伝達制御分子である Suppressor of Cytokine Signaling (SOCS)-1 の同定と機能解明や疾患マウスモデルを用いた生物学的製剤の作用機序の解明などの基礎研究と外来患者血清より同定し、昨年6月に炎症性腸疾患の活動性マーカーとして保険収載させました leucine rich alpha2 glycoprotein (LRG) に関する研究（今後は IL-6R 阻害抗体使用時の関節リウマチの活

動性マーカーなどに適応を拡大していく予定）などの臨床に基づいた研究があります。また、免疫難病創薬を目指した慶應義塾大学医学部、医薬基盤健康栄養研究所、国内製薬企業3社と国内初の産官学連携コンソの構築なども行っております。他に癌領域の創薬研究ではありますが、今年度から来年度に治験予定の研究も行っております。

私は「医学（研究）の発展なくして医療（臨床）の進歩はなく、医療（臨床）の進歩なくして医学（研究）の発展はない。医学と医療が車の両輪として前進することで、これまで治療法がなかった病気の根治が可能となる」と考えており、この考えの元、これまでの経験を活かして、岩手医科大学医学部内科学講座膠原病・アレルギー内科分野を常に新たなガイドラインの元になる診断薬・治療薬を創出できるような臨床講座に、また臨床と基礎の2つの視点から病気を診ることが出来る医療人を育成する臨床講座に育てたく考えております。近年、分子標的薬・遺伝子治療薬・再生医療など、従来の概念とは異なる医薬品が次々と開発され、社会実装されてきており、これまで有効な治療法がなかった関節リウマチや全身性エリテマトーデスなどの膠原病においても、「根治」が現実のものとなってきています。われわれは、これら近年の医学の進歩を、岩手県の膠原病医療に還元し、病に苦しむ膠原病患者の福音となる医療を目指し、東北地方で1番の膠原病・アレルギー内科分野の講座に育て、また岩手医科大学の更なるブランド力を向上させるべく、世界に向けた岩手医科大学発の診断薬・治療薬の創出も行いたいと思います。今後とも、圭陵會の皆様方のご指導とご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

令和3年4月1日付

圭陵会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。私は2021年4月1日付をもちまして、小山耕太郎教授の後任として岩手医科大学医学部小児科学講座第6代教授を拝命いたしました、赤坂真奈美と申します。2029年に100周年を迎える大変歴史のある当講座を率いる任の重さに、日々身の引き締まる思いです。この度は私のこれまでの歩みと、当講座の紹介および今後の抱負を述べる機会をいただき、心より感謝申し上げます。

私は1993年に自治医科大学を卒業後、岩手県内の病院や診療所で9年間、内科・小児科医として義務を果たし、その間に2人出産し子育てと両立しております。2000年に第4代千田勝一教授のもと、当講座の研究生となりました。第3代藤原哲郎教授が当講座で開発されたサーファクタント補充療法により、世界的に早産児死亡率は著しく低下しましたが、のちに脳機能障害が明らかとなる症例があり、私は少子化のなか早産児の後遺症なき生存率の向上が次の課題であると考え、超高磁場MRI診断・病態研究部門佐々木真理教授のご指導のもと、早産児の頭部画像、MR spectroscopyを用いた脳内代謝物質と発達の研究に着手し、継続してまいりました。2008年に「脳室周囲白質軟化症の頭部MRI所見と発達予後のロジスティック回帰分析」で学位を取得しております。さらに早産児は、脳障害のみならず、のちに様々な全身の合併症をおこしやすいことが認識されています。1980年代になり、欧州の疫学調査で将来の生活習慣病の一因に胎児期の状況が関与し、低出生体重児は、2糖尿病、肥満、心・血管疾患、高血圧など成人病のハイリスクであることが相次いで報告され、成人病胎児起源説と

医学部小児科学講座 教授 赤坂真奈美

して広く支持されるようになりました。胎児期の母体栄養を含めた環境因子が後天的なエピジェネティック異常を引き起こすことが解明されつつあり、超早産児が年間約3,000人出生する日本において、一人でも多くの早産児を健康な状態で成人へと導くための発達医学分野が今後重要になると考えております。

当講座は神経、総合（腎臓・消化器・アレルギー・内分泌）、循環器、血液・腫瘍・免疫、NICUに分かれ、専門性の高い診療と研究をしています。2020年には第5代小山耕太郎教授のご尽力により、全国で4番目となる寄付講座、障がい児・者医療学講座が開設されました。亀井淳先生が特命教授に就任され、年々増加する医療的ケア児や移行期医療の充実など重要な分野を担っています。

小児科学は、成長と発達の過程すべてが対象となる学問で、極めて広い医学領域を含んでおります。私たち小児科医には、幅広い診療能力、チーム医療、保護者への適切な対応などが求められます。当附属病院は県内唯一の小児科中核病院（基幹病院）です。当講座は今後も質の高い小児科専門医を育成し、岩手県内はもとより、北東北の小児医療の維持発展に注力し、時代や社会のニーズに即した高度医療を提供してまいります。子どもたちの健康維持・向上、家族背景やおかれた環境への配慮、人権や福祉の向上、医療の研究と発展、啓発活動、社会貢献を行うことを理念とし、多様性を認め合い、男女ともに活躍できる医局運営に尽力してまいります。今度とも変わらぬご厚誼を賜りますよう、よろしくご挨拶申し上げます。



教授就任のご挨拶

令和3年4月1日付

医学部睡眠医療学科 教授 西島 嗣生

圭陵会の皆様に置かれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、令和3年4月1日付けで岩手医科大学医学部睡眠医療学科教授を拝命いたしました、西島嗣生（にしじま つぐお）と申します。皆様の一方ならぬご厚情を賜り深く感謝いたしております。

私は、岩手県生まれの本学医学部出身で、旧内科学第三講座（呼吸器分野）に入局、その間県立大船渡病院に呼吸器科長としてお世話になりました。2011年本学に睡眠医療学科が設立され、櫻井滋前教授とともに睡眠呼吸障害を主とする呼吸器疾患の診療・研究を行ってまいりました。また、2011年の震災時の診療も経験いたしました。

睡眠医療に携わったのは本学第三内科に所属している頃からで、睡眠時無呼吸症候群の診断・治療が主たるものでした。2015年に取得した学位では、第40回日本臨床生理学会賞を受賞いたしました。睡眠時無呼吸症候群を対象とした、視床下部で産生される神経ペプチドであるオレキシンA様免疫反応性（orexin-A-LI）の血漿中濃度を検討した研究でした。当初は末梢血中にオレキシンAが存在するという報告は少なく、疾患を対象としては、初めての報告となりました。その後、オレキシン研究の指導医である東北大学大学院医学系研究科・医学部保健学専攻基礎検査医科学講座内分泌応用医科学分野 高橋和広教授と伴にいくつかの研究を進め、また高橋教授の紹介でLondonのIm-

perial Collegeに留学し神経タンパクと肥満との関連に関する研究を行いました。その後Sydney大学のWoolcock Instituteに留学し睡眠生理を学び、「睡眠は健康の基盤」と考える、最先端の睡眠学研究を行ってまいりました。帰学後も高橋教授と伴に（Pro）renin receptor（P）RRの働きに関する研究および疫学研究も行って来ました。今後もこれまでの研究を基盤として更なる研究に取り組んで参ります。

診療面では、内丸メディカルセンター内に睡眠医療センターが設立されて以降、毎週1回の他職種参加による診療および研究のミーティングを行っており、全てのスタッフが同じ考えを共有して診療・研究に取り組んでおります。このことが、来院する患者様にとっても不安なく受診していただけることに繋がっていると思っております。現在、少人数ながら苦も無く診療・研究に取り組む事ができるのは、全てのスタッフのおかげに他なりません。

今後も、東北地方における睡眠医療の拠点として診療・研究を進めて行きたいと考えております。また、本県出身者として、本学の発展と地域医療における幅広い貢献のために尽力して参りますので、今後ともご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

令和3年4月1日付

看護学部共通基盤看護学講座 教授 菖蒲澤 幸子

主陵会の皆様のおかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、令和3年4月1日付で、看護学部共通基盤看護学講座教授として着任いたしました。共通基盤看護学講座には、基礎看護学領域、成人看護学領域がございますが、私は基礎看護学領域教授として、看護専門科目の中でも「基礎」に位置付けられる科目を担当しております。

私は、昭和55年に弘前大学医療技術短期大学部衛生技術学科を卒業、臨床検査技師の免許も取得いたしました。「人相手の仕事、看護婦になろう！」と盛岡赤十字看護専門学校に入学、昭和58年に卒業して、そのまま盛岡赤十字病院に勤務しました。途中、平成7年4月から平成16年3月の閉校まで、母校である盛岡赤十字看護専門学校の専任教師として看護基礎教育に携わった経歴がございます。看護学校閉校後の盛岡赤十字病院での勤務では、外科病棟、外来、緩和ケア病棟でした。平成26年から27年、2年間でしたが教育研修推進室看護師長として、看護師の卒後教育にも携わりました。

その後、4年間を日本赤十字秋田看護大学看護学部の准教授として、学部では基礎看護学および看護管理学の科目、大学院修士課程では看護管理関連の科目を担当しておりました。このような経歴で、看護学校も

併せますと、実に41年間「赤十字」という組織の中にいたこととなります。

また、周囲のご理解とご協力のもと、働きながら岩手県立大学大学院看護学研究科に在籍し、修士課程で看護管理学を専攻したことにより、平成19年に日本看護協会認定看護管理者の資格を取得しております。その後、平成20年に博士後期課程を修了いたしました。

病院勤務時代は、看護現場の実践の改善につながる「看護研究」に熱心に取り組んで来ました。大学教員となってからは、修士博士課程の研究テーマの継続となる医療情報学や看護情報学関連の研究を行って来ました。今後も、引き続き、看護情報学に関する研究を行っていきたいと考えております。

看護学部は昨年度で完成年度を迎え、一期生がこの4月から臨床の場に出ています。これからの看護職には、高い知識・技術に加え、高い人間性が求められます。学生には、講義と演習、そして実習を通して、「援助する側」としての自己を振り返る態度を身につけてほしいと思っています。

大学教員としての年数は長くはありませんが、看護職を目指す学生に対して援助的に関わっていきたく思っております。皆様方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。